

## 平成28年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	演奏評価における自己評価と他者評価の一貫性		
氏名	森尻 有貴	所属	職名
		芸術スポーツ科学系 音楽教育学分野	講師
CITI Japan 研究倫理 e-ラーニングプログラムの受講		<input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること	
<b>【研究成果の概要】</b> （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）			
<p>本研究は、音楽の演奏者が自身の演奏を評価する際の評価基準や判断が、他者がそれらを実際に評価する際とどのような点で相違点があるのかと明らかにすることを目的とした。演奏の自己評価は客観性が低いことは、今までの研究でも明らかにされてきたが、特に音楽大学の学生等、プロの演奏家になる以前のレベルでは、その傾向が顕著に表れることが明らかになっている。しかし、実際には一定レベル以上の演奏家であっても、自己評価の様相は演奏技能に関わらず、個人のパーソナリティや評価に対する構造概念が影響していることが示唆されており、自己評価と他者評価には相違があることが伺える。そこで、本研究では、自己評価と他者評価の一貫性の程度、および音楽的にどのような点で相違点が見出される傾向にあるのかを調査することとした。</p> <p>本研究では、プロのピアノ演奏者6名（平均年齢31.5歳）による同一楽曲の演奏（各6録音）をそれぞれの演奏者にレパートリーグリッド法によって自己評価をしてもらい、順位付けをしたデータ（2016年以前に実施済みの研究プロジェクトのデータ）を利用し、他者による演奏評価を行った。本研究の実験協力者は、同一の演奏者によるシューマン作曲の「トロイメライ（Op.15 No.7）」を6録音聴取し（同一演奏者であることは実験当初には伝えていない）、レパートリーグリッド法（9件法）によって評価をし、最後に1位から6位までの順位づけを行った。1名分の演奏（6録音）に対し、4名の被験者を割り当て、合計24名（男=6, 女=18）が実験に参加した。24名の被験者はいずれも、音楽大学または教員養成大学音楽科の卒業生または在学中で、平均年齢は26.2歳（SD=8.4）であった。データは全てSPSS23によって分析を行い、主にクラスター分析を用いて、評価概念の構造を明らかにすることを試みた。また、演奏者自身が評価をした以前のデータを用い、自己評価と他者評価について比較検討を行った。</p> <p>分析の結果、演奏者自身が6回の録音から1番良いと判断したものと同一録音を、他者も選ぶ可能性は、全体の30%に過ぎなかった。演奏者自身が1番良いと判断したものを、他者が1番か2番目に良いと判断する可能性へと広げた場合、50%にのぼる。しかしながら、6名の演奏家のうち、2名の自己評価に関しては、自己評価で1番と判断した演奏が、全て他者からは最下位または下から2番目の評価を受けたことが分かった。その他4名の演奏に関しては、自己評価で1番と判断した演奏が、他者からも1番、もしくは2番と評される確率は76.5%となった。以上より、プロの演奏家であっても、自己評価が他者評価と著しく異なる可能性が明らかとなり、それは評価者ではなく演奏家個人によるものである可能性が示唆された。自己評価と他者評価が真逆となった2名の演奏家においては、演奏者と他者で同じ評価基準を設定するケースがあるにも関わらず、それに対する評価が異なる傾向が見られたことから、演奏表現を自己の表現として、良し悪しを判断する観念自体に相違点があると思われる。演奏評価により関与する音楽的要素は、テンポや音の間違いではなく、演奏の構成や音楽的表現、音色やフレージング等の方が、影響があることが明らかになった。</p>			
<b>【研究成果発表方法】</b>			
<p>ISME (International Society for Music Education) World conference への発表投稿を行うと共に、国際誌への投稿を準備中。</p>			